

研究ノート

陝西省・甘肅省・ウイグル自治区の観光における博物館活用の研究 中国甘肅省における博物館の現状と観光活用

落合知子*, 中島金太郎

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、*連絡対応著者)

Research on the Utilization of Museums in Tourism at Shaanxi, Gansu, Uighur Autonomous Region Current Situation and Tourism Utilization of Museums in Gansu Province

Tomoko OCHIAI* and Kintaro NAKAJIMA

(Department of International Tourism, Faculty Human and Social Studies,
 Nagasaki International University, *Corresponding author)

Abstract

This paper features a discussion based on the results of a survey of museums, ruins, historical sites, world heritage sites, old towns, etc. in Northwestern China conducted in 2018 as an aspect of joint research with the Department of International Tourism at Nagasaki International University. This year's survey was focused on Gansu Province, including the province's museums, ruins, world heritage sites, etc. Utilization of museums in the field of tourism as well as Chinese policies to promote tourism were analyzed. Museums in China have developed rapidly in recent years, and their display technologies and architecture now far surpass those used in Japan. Also, the attitudes of local residents could be considered to have changed at the same time as China also continues to lay the ground work for tourism and create comfortable environments for tourists. The purpose of this paper is to clarify trends in how museums are utilized in the field of tourism in China as well as trends in attitudes toward tourism by surveying changes in Chinese museums and townscapes.

Key words

Museum, World heritage, Old town, Tourism utilization, Multilingualization

要 旨

本研究は、平成30年度長崎国際大学国際観光学科共同研究の一環として実施した、中国西北域の博物館、遺跡、史跡、世界遺産、古鎮などの調査結果に基づく論考である。本年度は甘肅省に焦点を絞り、当該地域の博物館及び遺跡、世界遺産などを調査し、観光における博物館の活用と中国における観光対策について分析を図った。中国の博物館は近年急速に発展を遂げており、展示技術、建築物をはじめとして日本の技術をはるかに超えているのが現状である。それと同時に中国の観光整備も進み、観光客に対して過ごしやすい環境が整い、地元住民の意識も変化してきたと言える。中国の博物館や町並みの変化を調査し、中国における博物館の観光活用と観光に対する意識の動向を明らかにすることを目的とする。

キーワード

博物館、世界遺産、古鎮、観光活用、多言語対応

はじめに

本稿は中華人民共和国の西北部、中でも甘肅省蘭州市と天水市の博物館、遺跡、史跡、世界遺産、古鎮などの調査報告と、観光学と博物館学の両視点から観光と博物館について論じたものである。

甘肅省に隣接する陝西省西安市は唐代における長安の都であり、長安を起点として欧州にわたってシルクロードが東西文化を結んでいた。甘肅省蘭州市と天水市の位置する地域は、シルクロードの要衝として古くから栄え、長い歴史の中で様々な文物・史跡・歴史的建造物等が生み出された。そして、それらの文化遺産が継承され、今日では博物館の収蔵品や文化財として保存されると共に観光事業等に活用されている。特に2014年には、「シルクロード：長安―天山回廊の交易路網」の名称で当該地域を含むシルクロードの各所が世界遺産に登録され、世界各国より観光客が訪れている。

一方当該地域は、石油・石炭・金・銀などの地下資源に恵まれると同時に恐竜等の化石を多数産出しており、人文系・自然系共に豊富な資料を有する稀有な地域と言えよう。

本稿は、豊富な人文系・自然系資料に基づいて運営されている当該地域の博物館、および長い歴史の中で生み出された諸文化遺産の実地調査の成果を基盤とし、当該地域の博物館の現状と観光活用について考察するものである。

第1章 調査概要

1. 調査行程

本調査は7泊8日の行程で、8月20日(月)に東京羽田空港から北京経由で蘭州空港に調査入りした。翌21日(火)に天水市にバスで向かい、夕刻に到着するものの雷雨に遭ったため、麦積山の調査は翌日に延期となった。22日(水)の午前中に麦積山の調査を実施、午後は伏羲廟、天水市博物館、天水民俗博物館の調査を行った。その後蘭州市に戻り、23日(木)はロープウェイを使用して蘭州碑林を調査、その後金城関文化博覧園の

中に所在する蘭州黄河橋梁博物館、蘭州彩陶館、秦腔博物館、蘭州文化体验馆、蘭州非物質文化博物館を調査、次いで蘭州大学博物館を調査した。24日(金)は野外博物館の蘭州市水車博覧苑、敦煌の研究所に併設されている敦煌研究院芸術館、道教の寺院である白雲觀、甘肅省博物館を調査した。25日(土)は永登県博物館、甘肅永登魯士司衙門博物館、妙因寺を調査、26日(日)は蘭州市地震博物館、甘肅地質博物館を調査した。27日(月)、蘭州空港から北京経由で東京羽田空港に帰国して全行程が終了した。

2. 調査地域の概要

今回の共同調査では、甘肅省の中でも省都である蘭州市と省内の天水市を調査した。

蘭州市は、市域が海拔 1,600m の高地に位置し、市内を黄河が東西に流れている。市街地は黄河に沿って 20km に亘り細長く延び、黄河には12の橋が架けられている。蘭州は古くからシルクロードの要衝の地で、秦の昭王の時代に隴西郡の地となり、漢代には金城郡が設置されて、その金城が蘭州の古名となった。そして隋代の582年に蘭州が設置されて現在の名称となり、現在に続く歴史を有している。現在の蘭州市は、5市(城関区・七里河区・西固区・安寧区・紅古区)と3県(永登県・榆中県・皋蘭県)を管轄し、中国で5番目に設立された国家級新区であり、蘭州ニューハイテク産業開発区・蘭州経済区の2つの国家級開発区、4つの省レベル産業地区を有している(地球の歩き方編集室[2013])。

天水市は黄河と長江の流域上の分界線に位置し、北部は黄土丘陵、中部は渭河河谷域、南部は秦嶺山西区にあたる。天水市も古くからの歴史を有するシルクロードの要衝地であり、伏羲の故郷とも伝えられ、「中華民族と中華文明発祥の地」と呼称されている。天水の地名は、天の河がこの地に水を注いだとする「天河注水」に由来する。現在の天水市は蘭州市に次ぐ甘肅省第2の都市で、特に「麦積山石窟」(394~416

年頃の創建)は世界遺産にも登録されている世界4大石窟の一つであり、沢山の人々が訪れる観光地となっている(地球の歩き方編集室[2013])。

甘肅省には、蘭州と同様シルクロードの要衝として栄えた張掖市や武威市、酒泉市や敦煌市などが所在しているが、本調査では蘭州市を拠点として調査を行った関係上、無理なく調査が可能な位置関係にあり、特徴的な博物館・文化遺産の所在する天水市を比較対象として選定した。

第2章 甘肅省下における博物館、文化遺産

本章では、今回の調査で訪問した博物館および文化遺産の概要と現状を記し、実態把握を行うことを目的とする。また当該地域の博物館は、収蔵資料や運営形態に特徴があるものが多いものの、便宜上日本の博物館分類に沿って分類し、各項目においてその特徴を論述するものとする。

1. 世界遺産 麦積山

麦積山は、海拔1,700m、標高142mの高さを持つ礫岩質の独立した岩山に作られた石窟で、218の洞窟と7,800体余りの塑像・石彫刻、1,000m²近くの壁画が保存されている¹⁾。当該遺跡の築造は5世紀以降とされ、734年の大地震によって中央部が崩壊したことにより、東壁と西壁に分断された。特に北魏・西魏・北周時代の遺構・遺物が多く遺存しているが、隋・唐・五代・宋・元・明・清の時代にも新たな遺構が作られていたとされる。なお麦積山の名称は、山体の形状が農家が積んだ麦のように見えることに由来している(写真1)。

麦積山の見学は、ほぼ規制動線で行われる。まず麓の受付にて入山券を購入し、徒歩あるいは連絡バスにて入山口へ向かう。入山口には麦積山と主要な石窟に関する解説パネルが設置され、見学者は山体に設置された金属およびコンクリート製の階段と足場を伝いながら、東壁から西壁にかけて見学を進めていくルートが設定

されている(写真2)。

当該遺跡では、大半の石窟に金網を設けている点が特徴として挙げられる。これは、人・動物・昆虫等の石窟への侵入防止を目的としたものとされているが²⁾、遺構の保存ができる反面、外観が悪く内部も非常に見づらい印象を受けた。石窟内の仏像および壁画は、色彩まで良好に保たれているものが多く、生物被害の様子は確認できなかったところから一定の効果が認められる。しかし、金網の隙間から竇銭として紙幣をねじ込んでいる箇所が少なからず確認でき、また主要な石窟内には、仏像を照らすためのライトが設けられているが、点灯しているものは管見の限り見当たらなかったなど、観覧に不具合な点が散見された。



写真1 麦積山 遠景



写真2 麦積山 見学用足場

2．総合博物館

今回の調査では、甘肅省博物館、甘肅地質博物館、蘭州市地震博物館、蘭州大学博物館がそれぞれ総合博物館の範疇に含まれる³⁾。

甘肅省博物館は、その名の通り甘肅省下の歴史、民俗、自然等について扱う大型博物館である。同館は、1939年に開館した甘肅省科学教育館を前身とし、1950年に西北人民科学館、1956年に甘肅省博物館へと改称された。2006年には、建築面積2.85万m²、18の展示室を持つ新館が開館し、現在に至っている⁴⁾。

甘肅省博物館の建物は3階建てで、1階に特別展示室とミュージアムショップ、2階と3階が常設展示室となっている。常設展示は、「甘肅省におけるシルクロード文明」、「甘肅省の彩陶」、「甘肅省の仏教芸術」、「甘肅省の革命史」、「甘肅省の古生物化石」の6区に分類され、それぞれのテーマに関する通史的な展示が行われている。展示室の構成は、3階部に「彩陶」「仏教史」、2階部に「シルクロード」「革命史」の展示があり、概ね3階から順に展示を見学することで過去から現在への時間軸で見学が可能である。しかし、両階にそれぞれ「古生物」の展示が存在する独特の構成をとっている。3階部では、大型竜脚類の骨格標本を中心に据え、古生代から現生人類の誕生までを化石を中心に展示する。一方2階部は、地球の誕生から恐竜の絶滅までを展示しており、対象とする時間や資料が重複している。

当該展示構成に関しては、近似の展示が繰り返されることによって、観覧者に混乱を生じさせる恐れがあり、十分な理解を得られないのではないかという問題点が、展示を実見して感じられた。

甘肅地質博物館は蘭州市の中心部に所在し、地質を中心に展示する博物館である。甘肅省は、石炭、石油などのエネルギー資源、金・銀などの鉱物資源などを豊富に埋蔵し、中国有数の地下資源の産地として知られる。加えて、化石が豊富に出土する地域でもあり、先述の通り甘肅

省博物館にも多くの化石が展示されている。これらの地下資源を核とし、一般市民への地質に関する知識の普及や科学教育を行う拠点として、同館は整備されたとされている⁵⁾。

同館は4階建てで、1階に「序庁」、「地球庁」、2階に「鉱物岩石庁」、「宝玉石庁」、3階に「生命演化庁」、「土地資源庁」、4階に「地質環境庁」、「鉱産資源庁」の8展示室がそれぞれ設けられている。同館の展示は、大半が地質を核とした自然史展示であるものの、3階の「土地資源庁」には同省の産業や地勢・地史、測量史に関する展示室が設けられており、省都蘭州を核とした甘肅省の概要を学ぶことができることから、本稿では総合博物館に分類している。

蘭州市地震博物館は、蘭州市西部の十里桃郷に所在する地震をテーマとした博物館である。同館は、地震断裂帯の遺跡に所在する遺跡博物館であり、またかつての防空壕を転用している特殊な博物館でもある。防空壕時代に利用されていた部屋を改修して地震知識壁画、甘肅地震、文物史料、国外地震、5.12地震、抗震役防、地震什器の7区を設け⁶⁾、「地震」を核として、石碑、文書、陶器、絵画、機械、剥製、鉱物などの多様な資料を展示している点が特徴的である。

一方、防空壕を転用している関係上、館内の湿度が非常に高く、文書資料への水害が発生していた。水害の一部としては、写真3に示した色の薄い部分以外はすべて水浸しになっていることが例示できる。また、このような環境にあ



写真3 蘭州市地震博物館の文書展示

るにもかかわらず、文書の展示部分は正面からの接触を防ぐガラスが設けられているだけであり、ガラスの上下左右は開放状態にあるため、常に結露の影響を受けているのである。これ以外にも、床面の結露による転倒の危険、スチロールパネルからの紙の分離、壁面塗装の剥落、展示ケースや資料へのカビ被害、什器や展示物への錆の発生などの不具合が散見された。博物館の立地上、高い湿度は想定できたものであり、資料の保存かつ観覧者の安全と円滑な見学を考慮して、様々な面で改善が求められる。

蘭州大学博物館は、蘭州大学榆中校区に設置された大学博物館である。建築面積 9,600m²、展示面積 5,000m²とあり、日本の大学博物館でも最大級とされる京都大学総合博物館（約 2,640m²）の倍近くの展示面積を誇る。

館内は、「蘭州大学校史展」、「歴史文物展」、「古生物化石展」、「動植物標本展」の4展示室と、「黄河古象庁」、「民俗庁」の2つのホールから構成されている。同館の収蔵資料は、蘭州大学が研究のために百余年間収集・蓄積したものであり、全収蔵資料は23万点に及ぶとされている⁷⁾。

3. 歴史博物館

当該地域の歴史博物館としては、天水市博物館、永登県博物館、敦煌研究院美術館が挙げられる。

天水市博物館は、中国伝説の三皇五帝の第一皇である伏羲を祭った伏羲廟の敷地内に所在しており、同館の建物は隣接する伏羲学院と同様に伏羲廟の外観に似せて作られている。歴史的建造物のような外観に対し、エアタイトケースやデータロガーによる温湿度管理などを採用し、洗練された演示台などを用いた現代的な博物館設備を備えている。入口に設置されたイントロダクションパネルには、「2018年6月」の記述があり、ごく最近リニューアルをしたものと想定される。

同館は、天水市域の考古・歴史資料を主に展

示している。「文明曙光」と称される石器時代から清代に至る文物を展示する「歴史陳列展」を導入とし、「陶器展」、「青銅器展」など5つのテーマ展示室が組み合わされる展示構成をとっている⁸⁾。

永登県博物館は、蘭州市西北部の永登県の文物を収集・保管する博物館である。1990年に2,891点の資料をもって開館したとされ、2008年には無料開放を実施（甘肅省文物局編[2011: 1]）、2017年度にリニューアルオープンしたとされている⁹⁾。建築面積 1,690m²、展示面積 430m²と中国の博物館にしては比較的小規模であるものの、「九竜黄袍」をはじめとする国家一級文物を複数所有しており、その他同県内より集められた優秀な歴史資料のコレクションを有していることが特徴である。

また、同じ建物の地下一階には、「永登民俗文化展」と称する無形文化財を紹介する展示室が設けられている。同展示室に関する詳細な解説は無かったものの、タブレット端末による映像を多用した展示の採用や経年劣化が少ない点、展示室内に建材・内装剤等の匂いが充満していた点、2011年発行の『甘肅博物館巡礼 永登県博物館』に同室の記述がないことなどから、リニューアルに合わせて新設されたものと思われる。

敦煌研究院美術館は、蘭州市から西北方面に所在する莫高窟（敦煌石窟）の研究成果を示すために作られた、二次資料のみで構成された博物館である。館内には、現地の石窟より複写した原寸大の石窟模型や壁画（写真4）、3Dプリンターで出力した石仏が展示され、またVRゴーグルを利用した映像体験や、リアルタイムの現地映像の放映もあり、莫高窟を実際に見ているかのような体験が可能である。同館は、莫高窟の保存と調査成果の公開を両立するために設けられており、実物は無いものの詳細な文字説明や壁画等を間近に観覧できることにより、場合によっては現地よりも多くの情報を得ることができる施設と言えよう。



写真 4 莫高窟第220号窟の再現展示

4．美術館

美術館としては、蘭州碑林とシルクロード美術館が存在している。

蘭州碑林は、蘭州市中心部よりやや北方に位置する白塔山公園の一角に所在する。碑林とは、多数の石碑や墓碑などを一ヶ所に収蔵・展示した施設であり、隣接する陝西省にも西安碑林博物館と呼ばれる大規模な碑林があるなど、中国にはいくつかの碑林が見られる。蘭州市の碑林は、巨大な楼閣と回廊、それらに囲まれた中庭から構成されている。楼閣と回廊には、当該地域で揮毫あるいは執筆された様々な文章が石に刻まれており、観覧者は自由に歩きながら石碑を見学するスタイルをとっている。

シルクロード美術館は、天水市麦積区に所在する民営の美術館である。収蔵資料はシルクロード周辺域で作られたものを中心とし、一階部分には現地で「彩陶」と呼ばれる紀元前2600～紀元前2000年頃に黄河の上流域で焼かれた土器（いわゆるアンダーソン土器）が多数展示されていた。二階は、麦積山に作られた仏像の複製品展示室となっており、麦積山の現地では金網に邪魔されて観覧が困難な仏像を、細部まで間近に見ることができる点は好ましいといえよう。

一方同館は、美術館の名称を用いているが、日本の美術館とは異なり展示・公開と同時にその資料を販売する機能を有していた。先述の麦積山石仏の複製品も販売されているが、一階で展示されていた資料の中には実物資料とみられ

るものも多数含まれていた。これらの実物資料は、値段の書かれたラベルに出土地等は記載されておらず、入手経路等是不詳である。ただ、同館は麦積山に近い地域に所在しており、指定範囲内あるいはバッファゾーン内から盗掘・採取したものであれば、文化財保護の観点からも問題であることは間違いない。

5．歴史的建造物利用博物館

長い歴史の中で建設された様々な建造物を利用し、内部に展示を設けるなどして博物館としているものを、博物館学では歴史的建造物利用博物館と呼称している。当該館種は、建物そのものが資料的価値を有しており、建物の価値を損なわないよう最小限の改修や什器設置で博物館の体裁をなしている。また、建物に関連する出来事、風習などを、等身大の模型を用いて表現する傾向が見られ、観覧者に対し臨場感を持った情報伝達を実践している。当該地域には、天水民俗博物館と甘肅永登魯土司衙門博物館の2館が所在している。

天水民俗博物館は、元代に起源をもつ胡氏の旧宅跡を転用した博物館である。占地面積4,422m²、建築面積2,701m²を有し、12の住宅群（現地用語で民居院落）と78の独立建物から構成され、建物を改修して14の状況復元と11のテーマ展示室を設けている¹⁰⁾。展示内容は、天水域の民俗文化と民居文化とされており、当該地域の人々が子供に与える玩具や枕などの民俗資料などは展示ケースを用いて展示され、古住宅における生活の様子などは、当時の生活空間に模型を組み込むことで再現する展示を行っている。

甘肅永登魯土司衙門博物館は、チンギス・ハンの子孫である魯氏が治めていた衙門跡を保存し、博物館に転用したものである。土司とは、元時代以降中国南西地域の支配を確立するために、諸民族の首長に対し政府から与えられた世襲の官職を指し、明時代に同制度は確立したとされている¹¹⁾。魯氏は明代初頭に土司に就き、明・清・中華民国の三時代、562年にわたり世

襲を続けた¹²⁾。保存されている衙門（役所跡）は明時代の洪武年間に建築されたもので、現存占地面积40,000余m²、建築面積9,000余m²を有し、36の建築物、72の道門から構成され、「西北の小故宮」とも称されるなど土司衙門跡の中でも最大を誇っている。

土司が管轄する衙門では、地方統治のための様々な業務が行われ、裁判や行刑の役割も担った。甘肅永登魯土司衙門博物館では、「魯土司の歴史」、「魯土司衙門の建築構造」、「魯土司衙門の業務」、「民清時代の刑罰」などの展示室が設けられ、当時の様子を絵画や模型を用いて詳細に解説している。行刑の展示に関しては特に力を入れており、刑罰の種類や執行の様子などを複数の展示室にわたって展示している。

6. 野外博物館

蘭州市には、蘭州市水車博覧苑と称する野外博物館が所在している。同苑は、2005年に建設された蘭州の水車文化をテーマとする野外博物館で、博覧苑一帯は多くの人で賑わう河畔公園となっている。蘭州は黄河を利用して発展した町で、「水車の都」とも呼ばれ、博覧苑では50年以上前の黄河に林立していた水車の景観を再現している。蘭州の水車の歴史は明の時代に始まり、灌漑用器具として400年前に黄河沿岸に使用されていた蘭州水車は「天車」、「翻車」、「灌車」、「老虎車」などとも呼称されている¹³⁾。

展示されている水車の中には自分達で動かすことが可能なものもあり、子どもが参加できる展示となっている。また、水車を運動器具として利用する成人も見られ、老若男女問わず楽しめる体験型の展示を取り入れていることが特徴である。

7. 金城関文化博覧園

金城関文化博覧園は、5つの博物館から構成される博物館群の総称である。それぞれ、蘭州黄河橋梁博物館は「中山鉄橋」の歴史と関連する資料、蘭州彩陶館は先述の彩陶、秦腔博物館

は演劇、蘭州文化体験館は映画と音楽、蘭州非物質文化博物館は当該地域の無形文化財をそれぞれテーマとしており、同じ範囲に所在しながらも独立した展示を実施している。

同園は、蘭州碑林の所在する白塔山公園の縁辺部にあたり、黄河に初めて架橋された中山鉄橋が隣接する、蘭州観光の中心地に立地している。中山鉄橋を渡る観光客は非常に多く、渡橋した先に同園が所在しているので、多くの観光客が同園を訪問していた。特に、中山鉄橋の歴史を展示する蘭州黄河橋梁博物館は、同園の入口付近にあるため、まず同館に観光客を誘引し、そこを起点として他の博物館も併せて見学させるといった構図が成り立っている。中国の博物館に多いように、同園の博物館群も無料館であり、中山鉄橋観光のついで参りとして高い集客力を有していると観られる。

第3章 甘肅省域の博物館の傾向分析

これまで、甘肅省域の博物館の概要を示したが、見学を進める中で一定の傾向を見出すことができた。本章では、当該地域の博物館・文化遺産等に関する傾向を分析し、その実態について考察するものである。

1. 展示

今回訪れた博物館の展示傾向として、解説パネルは少なく提示型展示の手法を基本とする、等身大人物模型を多用しリアリティを追求した情景再現が多い、展示什器や映像機器に力を入れている一方で、保守管理や故障機器の更新に関する意識は希薄であることの3点の傾向を把握することができた。

の展示手法に関しては、観覧したすべての館でこの傾向が見られた。今回の訪問館では、甘肅省博物館の展示の一部に道具の使用方法を示す説示型展示や化石に触れる体験型展示が見られ、金城関文化博覧園の一部に炎が燃える様子を電灯で表した動感展示を採用していたが、概ねの展示は資料を置いて僅かな解説パネルと

題箋を付す提示型展示であった。

この理由としては、当該地域の博物館は優秀な収蔵資料を有しており、単体で展示しても十分鑑賞に堪えられることが考えられる。今回訪れた博物館では、考古資料の展示を見ても日本のように破片のみを展示するものは無く、歴史的価値や芸術性が一目でわかる資料が大半であった。当該地域は、黄河周辺域およびシルクロード周辺に育まれた長い歴史に裏打ちされた豊富な資料が遺存している。甘肅省博物館の前身は第二次世界大戦以前に開館しており、省内文物の保存および研究を行う機関として早くから発達したため、特に価値のある資料は同館へ収蔵されている。しかし、特に優秀な資料を除いたとしても、絶対的な量の豊富さから、地域博物館においても十分な展示ができるほどの資料が存在するのである。そして、これらの博物館では、モノを用いて地域の歴史や社会の仕組みを示すのではなく、地域を示す傍証として地域由来の資料を展示するのであり、そこに効率よくモノを用いた情報伝達を行うための各種展示手法は採用されていないのである。つまり、当該地域の博物館は「モノを見せる」展示に重点を置いていと看取される。

また、 としても挙げたように、映像展示、固定式情報端末、スマートフォン等の携帯情報端末を使用した展示解説が非常に発達しており、常設のパネルや資料の組み合わせを用いずとも、情報メディア機器を使用することで十分な情報伝達が可能との考えが存在すると思われる。中国の博物館では幅広く電子媒体による解説が導入されており、甘肅省博物館に設置された青銅器の使用方法を CG で解説する情報端末や（写真 5）、莫高窟内の 3 次元計測データから作成した仮想の石窟を自由に観覧できる敦煌研究院芸術館の映像機器など、日本の博物館よりも先進的な情報機器を導入している。また、今回訪れた多くの館で、二次元コードを用いたスマートフォンによる展示解説が行われていた。これは、WeChat などの SNS を利用したものと甘

肅省博物館のように独自のアプリケーションソフトを開発・採用するものの 2 種が存在するが、いずれもが展示室内のコードを読み取ることで展示解説を呼び出せる仕組みであった。これらの情報端末を駆使することで、パネル等では伝達しきれない情報を発信し、かつ展示室内の省スペース化を図っていると看取される。

は、天水市博物館、永登県博物館、蘭州碑林を除くほとんどの博物館で見られた傾向だが、特に金城関文化博覧園と甘肅永登魯土司衙門博物館ではその傾向が顕著であった。金城関文化博覧園では、彩陶を使用していた人々の生活再現に等身大模型を使用していたほか、蘭州非物質文化博物館の 2 階部分は原寸大の町並み再現と人物模型を組み合わせ、中華民国時代の蘭州の暮らしを再現していた。また、甘肅永登魯土司衙門博物館では、土司が裁判を行った建物に入棟することができ、兵士の等身大模型に囲まれながら裁判の様子を感じることができるほか、土司の生活や故事などの説明に等身大人物模型を多用している。

中国の博物館では、他地域でも等身大人物模型を多用する館は存在し、例えば上海市松江区に所在する広富林文化展示館では、広富林文化遺跡の発掘調査の状況、石器時代人の生活の様子、清代～近代にいたる人々の暮らしを展示するために等身大人物模型を用いている。他にも、現代中国の博物館を論じた『当代中国博物館』などの書籍には、等身大人物模型を用いて展示



写真 5 甘肅省博物館の青銅器解説機器

を構成している例が散見でき（段 [2017]）、同国の博物館展示手法として一般的なものであることがわかる。

に関してもほとんどの館に共通する傾向で、中でも蘭州市地震博物館、甘肅永登魯土司衙門博物館、蘭州大学博物館では、特に保守管理や故障機器の更新の不具合が見られた。蘭州市地震博物館の実態については前章で述べたとおりであるが、甘肅永登魯土司衙門博物館は入館口付近に所在する同館の建築についての展示室において、殆どのパネルが褪色していたほか、館内の映像機器はすべて故障しており、土司衙門に関する十分な情報伝達になり得ていなかった。蘭州大学博物館は、学校史展示の管理は行き届いていたものの、今回の調査直前に当該地域には珍しいほどの豪雨に見舞われたらしく、「民俗庁」は漏水による被害を受けた状態にあり、また調査が大学の夏季休暇中であったことから修復が全くなされていなかった。加えて、リーフレットに記載されている「動植物標本展」は閉室状態にあった。また、人文・自然史資料共に保存状態はあまりよくなく、一部の金属器に関しては錆によって崩壊しているものも見受けられた。

このように当該地域の博物館展示は、日本の博物館のそれとは理念や考え方が異なるものと看取される。中国は長い歴史に基づいた豊富な資料に恵まれ、昨今著しい経済成長に伴って博物館施設の数が飛躍的に増加している傾向が見られる（落合 [2014: 25-37]）。また、情報機器の急速な発達・普及に比例して、展示什器や情報メディア機器に最新技術を用いた工夫が凝らされ、一見洗練された展示空間が創出されている。しかし、優れた資料が豊富に存在するがゆえに「モノを見せる」ことに重点が置かれ、展示の技法については未発達であると思わざるを得ない。筆者の中国語読解能力では雑駁にしか情報把握はできないものの、解説パネル・題箋等の文字解説も不十分であり、資料に関する十分な情報伝達になり得ていないように感じら

れた。一方で、先進的な情報機器を導入することで、文字による情報伝達を情報機器に集約している。つまり、当該地域の博物館は、地域に由来する資料そのものを提示して、その希少性や芸術性を観覧者に伝えることが主であり、文字情報の伝達は電子媒体を通じて行われると理解できる。

2. 多言語対応

インバウンド観光を考慮するうえで、様々な国の言語に対応したサインや解説の設置、音声ガイドの整備は欠かすことができない。日本では2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に先立ち、政府が掲げる「2020年までに訪日外国人4,000万人」（観光庁 [2016]）の目標のもとに、様々な観光地や施設で多言語化が進められている。

中でも博物館は文化庁の管轄のもと多言語化を推進しており、2015年度より実施している「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」では、補助対象事業「(1)地域文化の振興と国際発信」の中に「多言語化による国際発信」の項目が設けられるなど、積極的な多言語化が試みられている¹⁴⁾。博物館における多言語化については多くの論考が出されており、最近では日本博物館協会が『博物館研究』2018年1月号で「博物館における多言語対応」と称する特集を組んでいる。また、訪日外国人増加を見据えた多言語化は多々実践されており、どの言語をどの程度採用するかは各博物館で試行錯誤しているが、観光統計データ等を反映して概ね英語・中国語・韓国語の表記が多い傾向が見られる。

これに対し、中国甘肅省域における博物館・文化遺産は、原則的に中国語簡体字と英語の2ヶ国語を使用した対応である。一部の館内サインなどを除き、地方の中小規模の博物館に至るまで英字題名や英字解説が普及していることを確認した。中国は、2001年のWTO加盟や2006年の北京オリンピック開催に先駆けて、2001年より小学校3年生からの英語教育を義務付け、高

校・大学・大学院入試、就職活動、資格試験において英語が重視される傾向にあることが新保敦子によって論じられている（新保〔2011：39-54〕）。中国では、日本と比較しても早い段階から英語に親しんでおり、また広大な国土から方言も多い地理的環境も相まって、コミュニケーションの手段として英語が浸透していると看取される。また、中国博物館条例の第34条には、「博物館は、（中略）コミュニティ文化建設及び対外文化交流・協力に参画しなければならない。（傍線筆者）」とあり（岡村〔2015：134〕）、明確な多言語化の記述はないものの対外的な方策をとる必要があることを謳っている。これらの背景により、地方の博物館までも英語表記が浸透していると観られる。

一方、麦積山の解説パネルや天水市博物館の館内サインなど、天水市内の施設においては僅かではあるが日本語表記が確認できた。本格的な日本語の採用は、麦積山のパネルのみであったが、これは日本人観光客の観光需要に基づいているものと推察される。麦積山では入山口に総合的な解説パネルが設置されているほか、各石窟の脇にもパネルが設置されていた。麦積山の解説パネルは、中国語だけでなく英語と日本語の3ヶ国語（石窟脇パネルの題名のみハングルを入れた4ヶ国語）対応を行っている（写真6）。一方、リーフレットは折りたたみの無いチケット状のもので、表面に中国語と英語による麦積山の解説、裏面の石窟の配置図には中・

英・日の3ヶ国語表記がなされていた。このように、自国民の利用だけでなく、海外からの観光客を見込んだ多言語対応が実践されており、本調査で訪問した施設の中で最も充実した言語対応であった。ただ、使用されている日本語の精度は低く、中国語・英語と比較しても設置箇所や情報量が少なかったところから、あくまでも中国語・英語の補助的なものとして設置されていると観られる。

しかし、外国人観光客の立場から見ると、当該地域の博物館には多々疑問を感じる。先の展示にも関わることであるが、当該地域の博物館では解説言語が中国語か英語であり、文字情報はスマートフォンや展示室備え付けの情報端末から入手することが主流となっていた。漢字を使用する言語圏であるとはいえ日本人には解説文章は難解で、漢字の意味と英語の内容を比較しながら多少理解ができるレベルであった。また館内に文字解説が少なく、情報端末からの文字情報にも日本語設定が無かったところから、各博物館の内容を十分に理解できたわけではなかった。当該地域の博物館では、資料の持つ希少性や芸術性について体感することはできるが、外国人に対するモノに関する情報伝達は不十分であると思わざるを得ない。特に当該地域の博物館は、見ただけでは用途や役割が理解できない歴史資料が多い傾向にあり、情報伝達の面では不十分であると考えられる。

一方当該地域の博物館は、文字情報を情報端末から引き出すことが多いところから、多言語の解説を情報端末から確認できるようにすることが肝要であると思われる。ICT化が全世界的に進み、世界中どこでもネットワークでつながっている今日、外国を訪問してもスマートフォンを持っていれば問題なく旅行できる環境が整いつつある。博物館においても、スマートフォンを介して母国語の文字解説を引き出すことができれば、外国人にもより多くの情報を伝達できるのではなかろうか。滋賀県立琵琶湖博物館では多言語対応音声アプリ「びわ博ナビ」を用い



写真6 麦積山の解説パネル

た解説が実践されており（楊 [2018: 11-14]）、また甘肅省博物館や地域は違うが上海博物館などでは、スマートフォンを用いた解説システムが設けられているところから、当該手法の実現も不可能ではないと思われる。

3. ミュージアムショップ、販売施設

ミュージアムショップは、利用者側からみれば博物館を一層楽しくしてくれる空間である。しかし、その本来の目的は博物館の展示や教育活動の延長であり、展示品や収蔵品にかかわる複製品や模型・標本類などを利用者に販売することにより満足感を与え、教育効果を高めることを意図した施設である。ミュージアムショップは、「博物館のコンセプトが品揃えや雰囲気反映された物販施設」と定義されており（山下 [2012: 177-185]）、またミュージアムショップは展示の延長であり、そこで取り扱う商品は、自館の収蔵品をモチーフとしたもの、あるいは当該地域に関連のあるものが望ましいとする意見も存在する（青木 [2014: 174-175]）。つまり、ミュージアムショップでしか買えない、博物館の印象を端的に表現できるような商品が求められるのである。

本調査で訪れた博物館等では、16ヶ所中9ヶ所に何らかの販売施設を有し、その内甘肅省博物館と金城関文化博覧園には特徴的な販売施設が設けられていた。

甘肅省博物館は、2階の吹き抜け部分に書店、1階の出口前に比較的広い面積を持ったショップを設けて多様なグッズを販売していた。1階のショップでは、実物資料を精巧に複製した二次資料が複数種販売されている一方で、スマートフォンカバーやキーホルダーといった安価なグッズも販売されており、その品数は日本の多くのミュージアムショップとは比肩できないほど豊富であった。

また金城関文化博覧園では、蘭州刻瓢筆（瓢筆細工）や蘭州泥塑（塑像）などの伝統工芸品を製作・販売する工房が設けられていた。これ

は、同園内の蘭州非物質文化博物館で展示する当該地域の無形文化財の普及・広報を目的としたものと思われる。実際、同園を訪れた多くの人々がこれらのショップを訪問しており、ある程度の広報効果はあると思われる。

しかし、上記の多様な博物館に対して明確なミュージアムショップが少なかったことは残念な点である。東京国立博物館や江戸東京博物館に代表されるいわゆるミュージアムショップは、今回訪問した限りでは甘肅省博物館だけであり、他館の販売施設では品ぞろえが良好なものは少なく、オリジナリティにあふれたグッズ等もあまり見受けられなかった。

松永久は、ミュージアムショップ充実の度合いは来館者の最終的な満足度を決める重要な要素であると自著の中で述べており（松永 [2005: 50-54]）、筆者も同意見である。青木は、「ミュージアムショップは展示の延長」と位置付けたことは先述の通りであるが、博物館で観覧した資料に関連するグッズをミュージアムショップで購入することは、博物館の思い出を物質的に持ち帰ることであり、観覧者に対して博物館の強い印象付けになり得る。持ち帰ったグッズを再び見ることで、訪れた博物館のことを思い出し、そこにタグ付けされたエピソードを呼び起こすことに繋がる。つまりミュージアムショップは、来館者の記憶に接続する機能を有するのであり、そこで扱うグッズは来館者が欲しくなるような誘因性を持ち合わせなくてはならない。甘肅省下の博物館はその意識が脆弱であり、ユーモアやオリジナリティに富んだ観覧者が欲しくなるグッズを販売するショップになり得ていないのである。

一方で、同じ中国域の博物館でも、人口及び利用者数の多い上海市域の博物館（上海博物館、上海歴史博物館、上海自然博物館ほか）には魅力的なグッズを多数販売するミュージアムショップを設けている例が多く、甘肅省下の博物館も国内の事例を参考にしつつ、より良いミュージアムショップを構築する必要があると考える。

おわりに

当該研究は、中国西北域の博物館、世界遺産、古鎮等の調査から、博物館の観光活用と観光に対する意識の把握を目的としたもので、本稿は甘肅省下における観光資源としての博物館・文化遺産の現状と課題について分析を行った。甘肅省下の博物館・文化遺産は、展示や多言語対応などの観点から共通した傾向が見られるが、数多くの課題も存在することがわかった。中でも多言語対応など、現状日本の博物館・文化遺産が抱えている課題は当該地域の博物館・文化遺産にも共通しており、これらが持つ問題点を把握・精査することで日本の問題を解決する糸口になり得ると思われる。博物館・文化遺産を観光という切り口から見た場合、まず集客するまでが重要であるが、如何に楽しく快適に観覧するかといった視点も必須であり、ミュージアムショップを含む便益施設などの博物館・文化遺産を補佐する存在も十分に検討しなくてはならないと筆者は考えるものである。

なお、当該研究は2019年度も継続して実施し、次年度は地域を変更して調査・研究を行う予定である。次年度は、中国西北域の中でも観光活用が盛んであり、甘肅省に近接する陝西省や河北省などの博物館・文化遺産の調査を計画している。当該地域を調査・研究することで甘肅省との比較検討を行い、中国西北域における観光資源としての博物館・文化遺産の現状把握と今後のあり方について検討していきたいと考えている。

注

- 1) 麦積山に設置された解説板の説明より抜粋。
- 2) 現地ガイドの説明より。
- 3) 本稿での総合博物館は、「公立博物館設置及び運営に関する基準」に記された「人文科学及び自然科学の両分野にわたる資料を総合的な立場から扱う博物館」を意図している。
- 4) 甘肅省博物館リーフレットより意訳。
- 5) 甘肅地質博物館リーフレットより意訳。
- 6) 蘭州市地震博物館リーフレットより意訳。
- 7) 蘭州大学博物館リーフレットより意訳。
- 8) 天水市博物館館内パネルより意訳。
- 9) 永登県博物館解説員の説明より。
- 10) 天水民俗博物館解説板の説明を意訳。
- 11) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』より。
- 12) 甘肅永登魯土司衙門博物館チケットの説明より意訳。
- 13) 蘭州市水車博覧苑解説板より意訳。
- 14) 文化庁 HP「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shien/kaku/
(2018年10月9日閲覧)

参考・引用文献

- 青木 豊 (2014)『集客力を高める博物館展示論』雄山閣
- 岡村志嘉子 (2015)「中国の博物館条例」『外国の立法』264国立国会図書館調査及び立法考査局
- 落合知子 (2014)「中国における野外博物館の現状と課題」『國學院雑誌』第115巻第8号, 國學院大學, 25-37頁.
- 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 (2016)『明日の日本を支える観光ビジョン』観光庁
- 甘肅省文物局 編 (2011)『甘肅博物館巡礼 永登県博物館』甘肅人民美術出版社
- 新保敦子 (2011)「現代中国における英語教育と教育格差 少数民族地域における小学校英語の必修化をめぐる」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第21号, 早稲田大学大学院教育学研究科, 39-54頁.
- 地球の歩き方編集室 (2013)『地球の歩き方ガイドブック 西安・敦煌・ウルムチ シルクロードと中国西北部 2014年~2015年版』ダイヤモンド社
- 段 勇 (2017)『当代中国博物館』峰林出版社
- 松永 久 (2005)「21世紀のミュージアムショップ」『博物館学雑誌』第30巻第2号, 全日本博物館学会, 50-54頁.
- 楊 平 (2018)「博物館における多言語対応」『博物館研究』平成30年1月号 日本博物館協会, 11-14頁.
- 山下治子 (2012)「3 ミュージアムショップとレストラン」『博物館学 博物館情報・メディア論*博物館経営論』学文社, 177-185頁.

執筆分担

落合知子: 要旨, はじめに, 第1章, 第2章6
中島金太郎: 第2章1~5, 7, 第3章, おわりに